

## 三国時代魏鏡の存在

小 山 満

### 1. はじめに

本稿では原田大六氏により発掘された邪馬台国時代の伊都国として知られる有田平原遺跡で出土した 40 面の鏡のうち方格規矩四神鏡を主な対象として検討する。

原田大六氏は、執筆した報告書で方格規矩四神鏡と遺跡の年代を後漢中期、弥生時代後期の 2 世紀中ごろとしていた<sup>1</sup>。

柳田康雄氏によると、平原遺跡は副葬品からみて弥生終末の 3 世紀初頭（後漢）まで下がる可能性があるという。氏が執筆した報告書では、後漢末から三国時代の鏡との類似性に注目している<sup>2</sup>。ただ氏は、主に模倣鏡・復古鏡の可能性を追求していたので、三国時代として検討することはなかった。

3 世紀とする人は、ほかに奥野正男、森浩一、古田武彦氏がいる。

奥野正男氏は平原出土の尚方鏡に文字の退化現象が起きていることに注目して、洛陽出土鏡では後漢後期までこういった文字の退化現象の鏡が一面も現れていないので、平原鏡はこの時代以降の 3 世紀となると指摘していた<sup>3</sup>。退化現象については中国の研究者も指摘していた<sup>4</sup>。

森浩一氏は出土した 40 面の鏡の中に 4 面ある超大型鏡とされる直径 46.5 センチメートルの鏡が、発掘者原田大六氏が伊勢神宮にある八咫鏡と同じと想定したことに対して、これを正当とし、それらは弥生時代後期におさまるものの、年代は 2 世紀中ごろとした報告書に対してそこから半世紀ないし 1 世紀ほど下がる可能性があるともみていた<sup>5</sup>。

古田武彦氏は、北部九州に出現した四王墓—三雲、須玖、井原、平原の順—のうち、卑弥呼の時代に相当する遺跡として、矛 5 本と中国製紺地房糸を出土した須玖遺跡をあげて、鏡の様式変化と埋納棺（甕棺から木棺へ）の違い、および『魏志倭人伝』記載の勾珠五千孔、青大勾玉二枚の貢献物と、出土品のガラス製勾玉、管玉、連玉、小玉との類似性からみて、平原遺跡が壺与の時代に最も近い王墓であると想定した<sup>6</sup>。

### 2. 曹操、曹植の鏡

<sup>1</sup> 原田大六『平原弥生遺跡—大日靈貴の墓』1991,上巻 p.58,64

<sup>2</sup> 柳田康雄「伊都国の繁栄」『西日本文化』1998,p.9.10 「平原王墓の性格」『東アジアの古代文化』99,1999, p. 5.9.11.12.13 「方格規矩鏡の検討」『平原遺跡』前原市文化財調査報告書 70,前原市教育委員会 2000, p.117

<sup>3</sup> 奥野正男『邪馬台国の鏡』1982,p.237。また奥野氏は方格規矩鏡の L 字文が通常の逆の左に折れると指摘していた p.236。後に研究を進めた福永伸哉『三角縁神獸鏡』大阪大学出版会 2005 において重要なヒントになっている。p.46-68

<sup>4</sup> 周世榮『湖南省出土銅鏡図録 1960,概述。王士倫『浙江省出土銅鏡選集』1958 序文

<sup>5</sup> 森浩一『日本神話の考古学』1993p.79

<sup>6</sup> 古田武彦『邪馬一国の考古学』2010,p.87-88

## 1) 曹操鏡

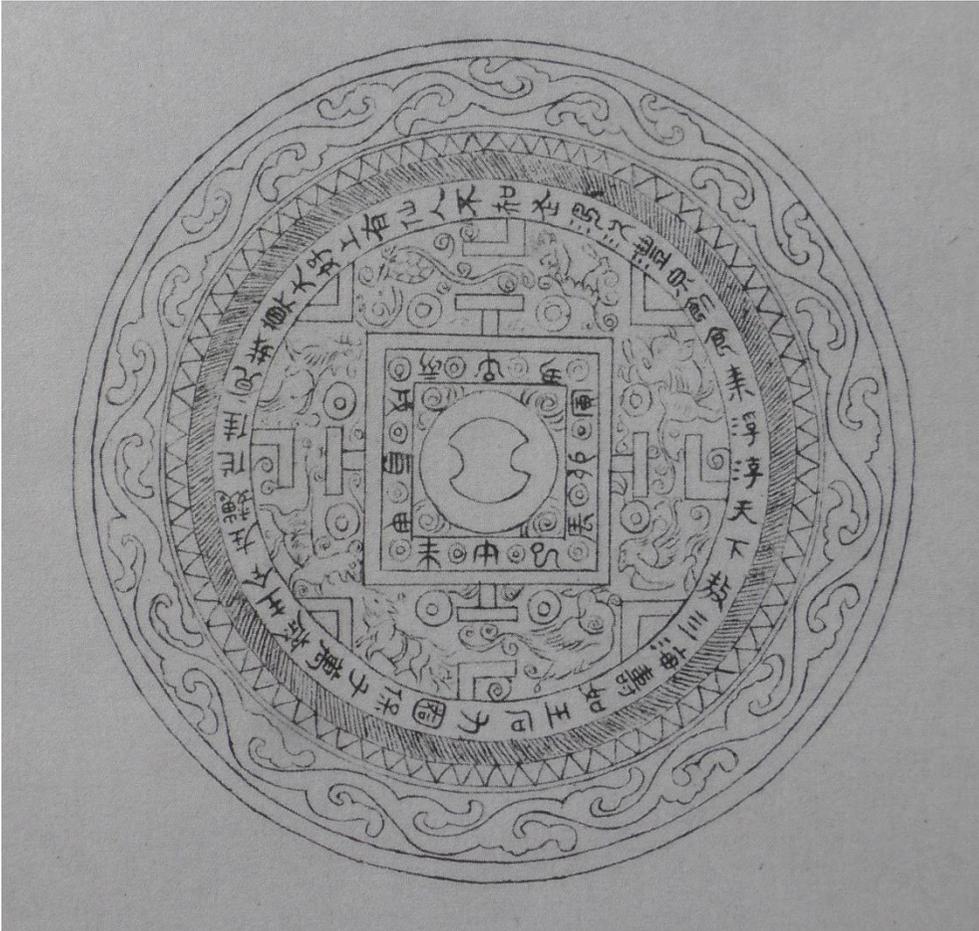


図1 曹操鏡

曹操鏡とされる方格規矩四神鏡（図1）は、梅原末治氏により「所謂王莽鏡に就いての疑問」の中で紹介された<sup>7</sup>。鏡銘は次の通りである。

「作佳鏡哉真大好 上有山人不知老 渴飲灑泉飢食棗 浮游天下敖三海 壽如王石為國保 子萬歲 王今在魏」<sup>8</sup>

この鏡銘末尾の「王今在魏」について、『三国志』魏書1 太祖建安18年と19年条にある魏公と、21年条にある魏王をあげて<sup>9</sup>、彼が「後漢の献帝から魏王に封ぜられて、勢力が全く漢室を圧した際の事柄を現したもの」「従って（鏡は）彼の魏王となった建安21（216）年以降その崩じた同25（220）年に至る4年間のもの」と述べている。

今日までもこの鏡は見出されていないので、信憑性に欠けるきらいがあることから、これまであ

<sup>7</sup> 梅原末治『鑑鏡の研究』大岡山書店 1925,p.1-35

<sup>8</sup> 『西清続鑑』上海商務印書館 1911 甲 19,p.29 早稲田大学図書館所蔵

<sup>9</sup> 陳寿『三国志』魏書,中華書局 1982 版 p.47,53

まり論じられていない。が、一応岡村秀典氏はこの鏡について王莽代または後漢初期の作品と想定している<sup>10</sup>。ともかく、同種の鏡を見出すことはできる。

一つは和氣満堂所蔵の方格規矩四神鏡で、径 18.8 cm。子を上中央にして右肩から「作佳竟哉真大好 上有山人不知老 渴飲王泉飢食棗 浮游天下敖三海 壽敝今石為家保」とある。図 2<sup>11</sup>



図 2 方格規矩四神鏡 18.8 cm

また王綱懷氏の『漢鏡銘文圖集』下No.330、336の二鏡(図3、4)はともに作佳鏡哉で始まり、前者では「作佳竟哉真大好 上有山人不知老 明如日月昭三海 壽敝金石為國葆」とある。画像の配置に類似性があり、後者では「作佳鏡哉真大好 君宜官秩長相保 上有仙人不知老、渴飲禮泉飢食棗、浮游天下敖四海 壽敝金石為國葆」とある。曹操鏡では金が王(玉)、葆が保になるなどの違いがあるが葆字は双方にある<sup>12</sup>

<sup>10</sup> 岡村秀典「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55,1993 方格規矩四神鏡の項

<sup>11</sup> 『古鏡—その神秘の力—』川崎市市民ミュージアム,2015,p.34,図II-62

<sup>12</sup> 王綱懷『漢鏡銘文圖集』下,上海中西書局 2016,図No.330,336



図3 王綱懐『漢鏡銘文圖集』下No.330、16.3 cm



図4 同No.336、23.0 cm

富岡謙蔵氏の『古鏡の研究』には、保字について「黄本驥『避諱録』に依れば保は順帝の諱なり。故に後漢の一代は此の字を忌みて用いず、治の字を代へ用ゆ」と述べ、その結果保字を用いるのは順帝より前かあるいは後漢より後であろうとしている<sup>13</sup>。『史諱举例』には保字に代えて守の字を示している<sup>14</sup>。したがって避諱のため治や守のほかには葆の字も代字とすれば、この二鏡は葆字を用いているので、順帝（劉保、126-144 在位）以降の後漢時代後半に製作された鏡ということになる。

## 2) 曹植鏡

曹植鏡とされる方格規矩四神鏡〔東阿鏡〕（図5）は、同じく梅原氏により同論文の中で紹介されている<sup>15</sup>。氏は『金石索』<sup>16</sup>で記す鏡の縁に東阿宮と鑿で刻入している状況と、この鏡が東阿王すなわち魏曹植の墓が東阿県魚山の麓にあることから、二代文帝（曹丕）の弟曹植が東阿王に封ぜられた太和3（229）年から、彼が死去する同6（232）年の間の鏡であろうとした<sup>17</sup>。左上虎から始まる銘文はつぎの通りである。

「昭是明鏡人快意 左龍右虎四時宜（置） 常保二親樂母（無）事 長宜子孫家大富 與君相保常相思」/東阿宮口/<sup>18</sup>

<sup>13</sup> 富岡謙蔵『古鏡の研究』臨川書店 1974, p. 219

<sup>14</sup> 陳新会『史諱举例』台湾文史哲出版社 1987, p. 132

<sup>15</sup> 『鑑鏡の研究』上掲注 7, p. 12-14,

<sup>16</sup> 憑雲鵬『金石索』上海 1907, 上 p. 859 金索六, 魏東阿鏡

<sup>17</sup> 『三国志』魏書, 上掲注 9, p. 569, 576

<sup>18</sup> 徐乃昌蔵『中国古鏡拓影』末永雅雄・杉本憲司編, 木耳社, 1983, №83



図5 曹植鏡 18.8 cm

この曹植鏡に近似する鏡として王綱懐No.315がある(図6)<sup>19</sup>。子を中央上にして見ると四神の青龍がともに辰巳(下右)から始まり右へ東南西北とめぐり。違いは左上白虎の前後の獣で馬→仙人、一角獣→朱鳥に変わる程度。銘文は左上白虎の位置から右へまわる。「朱氏明鏡快人意、上有龍虎四時宜、常保二親宜酒食、君宜官秩家大富、樂未央宜牛羊」とある。

<sup>19</sup> 王綱懐『漢鏡銘文圖集』,上掲注12, №315



図6 王綱懷 No.315 17.1cm

図像よりも銘文において類似する鏡は同じく王綱懷No.331にある(図7)<sup>20</sup>。周銘に「昭是明鏡誠快意、上有龍虎四時宜、長保二親樂毋事、子孫煩息家富熾、予天無極受大福、兮」とある。銘文が左上白虎の位置から昭是明鏡で始まる同一性がある。したがって曹植鏡において画像、銘文ともに近似性の高い鏡を見出すことが出来るので、魏曹植鏡の存在を疑う必要はないと思われる。またこの曹植鏡に記す保字は2つあるが葆ではない。後漢時代を過ぎたため避諱による葆は用いていないとみるべきであろう。またともに曹植鏡であるが徐乃昌氏が『中国古鏡拓影』83で示した拓本(図5)と、『金石索』所載の図(図8,9)では<sup>21</sup>、子を中央上にしてみると、いずれも虎の位置(上左,右上)から銘文が始まり、青龍が下右、左下から始まっている。これは図像の内容は変わらないが十二支の位置が90°ズレているためである。方格規矩四神鏡が方位と時間を示すという原則からみると、これらは逸脱あるいは退化の傾向を示していると思われる。梅原氏が紹介し掲載した『金石索』の図(図8)と同再販本の図(図9)とでは、違いとして新たに図を描き起した様子が見える<sup>22</sup>。違いの原因は不明であるが、鏡の複製を作成した時に誤ったか描き起こし時に誤ったかのいずれかであろう。

<sup>20</sup> 王綱懷『漢鏡銘文圖集』,同上,№331

<sup>21</sup> 『金石索』所載の図,上掲注16,

<sup>22</sup> 『金石索』,「金索」鏡鑑,上掲注16



図7 王綱懷 No.331 21.4cm

方格規矩四神鏡についての考察は、渡部武の『画像が語る中国の古代』にある<sup>23</sup>。氏は「盤上の小宇宙と六博ゲーム」で先学の研究を紹介し、とくに中国歴史博物館所蔵の方格規矩四神鏡に「刻具博局」とあることで、当該鏡を博局鏡と名付けるべきだと論じた周錚氏の論文を紹介し<sup>24</sup>、その上で方格規矩文が宇宙の表徴として、占い盤や日時計に由来するとみる見方を妥当な解釈だとしている。すなわち中央の正方形が大地で十二支を入れて時を表し、それを取り囲む円形が天で、間に四神を描いて四方を示し、四方にある TLV は天を支える用具であるという林巳奈夫氏の説を紹介し<sup>25</sup>、鏡に刻んだその小宇宙を自己に取り込み神秘的な力が得られるとしたという。その後方格規矩の文様は双六に似たゲームを通して生活の中に溶け込む様子が伺え、図像の逸脱化の傾向がここに由来することがわかる。

図像のズレについて、奥野正男氏が上記洛陽出土鏡では後漢後期まで文字の退化現象の鏡が一面も現れていないので、平原出土の尚方鏡の文字の退化現象は、この時代以降の3世紀になると

<sup>23</sup> 渡部武『画像が語る中国の古代』平凡社1991第9章p.236。

<sup>24</sup> 周錚「規矩鏡応称博局鏡」『考古』1987-12

<sup>25</sup> 林巳奈夫『漢代の神々』臨川書店1989第2章「漢鏡の図柄二、三について」

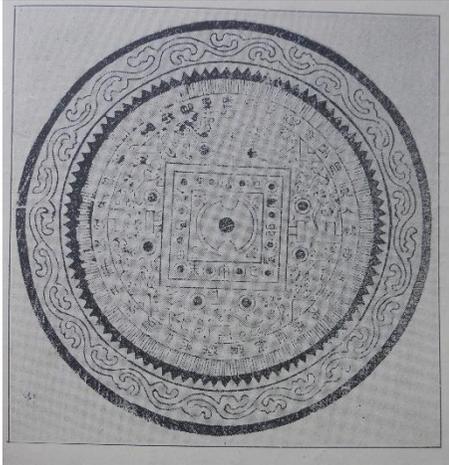


図8 曹植鏡 梅原著 18.8 cm



図9 曹植鏡『金石索』 18.8cm

指摘した点が想起こされる<sup>26</sup>。つまり思想的意識の薄れと慣例化による退化現象が図像の配置のズレにもつながっているということであろう。

また、柳田康雄氏が報告書で指摘した、方格規矩四神鏡の銘文は、通常子を上、中央として上または右上から始まると言い、平原出土の8面の鏡は下あるいは左側から始まるので、これらが後漢末か三国時代の鏡であるか、あるいは模倣鏡、復古鏡に見られる現象であると述べた点もここで意味を持ってくる<sup>27</sup>。また平原鏡と同じ銘文が上から始まるタイプの鏡の中に避諱の葆字が見えるので、平原鏡の時期も上記後漢順帝以降という推測が可能である<sup>28</sup>。

ともかく、方格規矩四神鏡は前漢末、そして王莽から後漢期に広がり、曹操、曹植の時にも用いられている<sup>29</sup>。したがって、方格規矩四神鏡が三国魏においてもなお存在することがこれで確認できた。また曹操が後漢の王朝を受け継ぎ、最後まで帝位に就かなかったという慎重な彼の保守的態度も、この長期にわたる方格規矩四神鏡の継続していることに関連するのではないかとも思われる<sup>30</sup>。

### 3. 五行思想から

五行思想の研究は古く顧頡剛の『古史辨』に見出すことができ、この陰陽五行説は戦国時代の鄒衍により唱えられ、秦の始皇帝が社会制度に採用して定着していくという<sup>31</sup>。前漢では劉向父子が

<sup>26</sup> 奥野正男『邪馬台国の鏡』p.237,上掲注2。岡村秀典氏は四神を中心とした宇宙観の変容であるとして単なる退化現象とみることを疑問視している。上掲注9p.48

<sup>27</sup> 上掲注2『平原遺跡』前原市教育委員会p.117。本稿の図は子を真上に置いているので図8のように文字が逆の場合がある。

<sup>28</sup> 『和泉市久保惣紀年美術館蔵鏡図録』1985図版23、『守屋孝蔵蒐集方格規矩四神鏡図録』京都国立博物館1970,№35,梁上椿『巖窟蔵鏡』同朋舎出版1989,№266など。

<sup>29</sup> 樋口隆康『古鏡』新潮社1979,p.140でも、前漢末から三国に及ぶと述べている。

<sup>30</sup> 『魏武故事』「十二月己亥の令」。参照；河合康三「曹操」『六朝詩人群像』大修館書店2001,p.14-19

<sup>31</sup> 顧頡剛「五徳終始説下的政治和歴史」『古史辨』5冊下,景山書社1935p.423-430

土徳から火徳に変えたと『漢書』郊祀志に記している<sup>32</sup>。これは相克説と相生説を整備し直したもののという。ついで新の王莽は前漢の火徳をうけて土徳とし、「火徳銷尽、土徳当代、皇天眷然、去漢与新」と『漢書』王莽伝に記している<sup>33</sup>。

後漢は光武帝紀に「始正火徳、色尚赤、漢始土徳、色尚黄、至此始明火徳…」と記して、前漢後半と同じ火徳でいくことを明らかにした<sup>34</sup>。ではつぎの三国魏朝はどうか見てみると、『三国志』魏書、曹操武帝紀建安元(196)年「至是宗廟社稷制度始立」の注で、帝となる曹操に「天命有去就、五行不常盛、代火者土也、承漢者魏也…」と臣下王立が述べて魏の土徳を明らかにしている<sup>35</sup>。

曹丕の弟曹植の詩「文帝(曹丕)誄」には文中に「五行定紀」とあり、五行を意識している様子がみえる。曹海東氏の注釈では「魏承漢位、漢以火徳王天下、魏則以土徳統其世」と説明して、魏が五徳の相生説(木火土金水の順)の土徳にあたるとしている<sup>36</sup>。

ではつぎに曹操の鏡に「渴飲豊泉飢食棗」と記していることと、下記図表の中の土徳の列に五果として棗(ツナツメ)があることに注意して見てみよう。

二代の文帝曹丕は「詔群臣」で「凡棗莫若安邑御棗也」と述べて、棗に対して天子に関係する御字をつけて御棗と呼んでいる<sup>37</sup>。また『文選』巻1「魏都賦」でも「信都之棗」の説明に「信都属安平出御棗」とあり、同じく御棗と呼んでいる<sup>38</sup>。したがって、五果の棗が五行思想に基づく魏朝の尊ぶ品であったことがわかる。よって、古鏡の銘文に「飢食棗」とあるのは単に神仙思想としてだけでなく、五行思想の相生説で五果を棗にする魏の土徳に合致して使われていた可能性があるということである<sup>39</sup>。また、五経の詩が土徳であることと、曹操父子および建安七子の詩文による活発な文芸活動がこれに符合することも裏づけとなるであろう。表1参照<sup>40</sup>

しかし上記の通り『漢書』王莽伝に「火徳銷尽、土徳当代」とあり<sup>41</sup>、土徳は王莽の新代でも該当しているので、土徳を魏代に絞り、棗とあれば魏というわけにはいかない憾みがある。三木太郎氏は大著『古鏡銘文集成』の中で王莽の新代が土徳であることに言及して、王莽期の鏡を独自に新漢鏡と名付け、該当する鏡を多数あげて、これまでの定説を覆す意向にある<sup>42</sup>。その当否はここで細説できないが、王莽の統治期間の短いことからみて無理がある。識者は五行思想が後漢以降に盛んになると言っているので、王莽後の時代を検討する必要がある<sup>43</sup>。

<sup>32</sup> 班固『漢書』郊祀志,中華書局 1962,4-p.1270-71

<sup>33</sup> 『漢書』王莽伝,同上 12-p.4113

<sup>34</sup> 范曄『後漢書』光武帝紀中華書局 1965,1-p.27 注 1

<sup>35</sup> 『三国志』武帝紀,上掲注 9,p.13 注

<sup>36</sup> 曹植「文帝誄」『新釈曹子建集』三民書局 2003,p.488

<sup>37</sup> 曹丕「詔群臣」『曹丕集』4-18『曹丕集逐字索引』香港中文大学 2000,p.35-37

<sup>38</sup> 蕭統『文選』巻1左太冲「魏都賦」上海古籍出版社 1986,1-p.290-291

<sup>39</sup> 蕭吉『五行大義』古典研究会叢書,1989,漢籍 7,8

<sup>40</sup> 参照;中村璋八『五行大義』明德出版社,1975。同『五行大義校註』汲古書院,1984。『漢辭海』三省堂,2013,p.49

<sup>41</sup> 上掲注 32『漢書』99 王莽伝,中華書局版 12-p.4113

<sup>42</sup> 三木太郎『古鏡銘文集成』新人物往來社 1998, p. 61

<sup>43</sup> 笠野毅「中国古鏡の内包する規範」『日本民族文化とその周辺』新日本教育図書 1980, p.605-611。閻淑珍「灸療法における八木の火避忌」『陰陽五行のサイエンス』京都大学人文科学研究所 2011,p.168-69。三崎良章『五胡十六国』東方書店 2012,p.172

表 1

五行	木	火	土	金	水
五朝	秦	兩漢	新・魏	晋	宋
五経	楽	書	詩	礼	易
五方	東	南	中央	西	北
五時	春	夏	土用	秋	冬
五獸	青龍	朱雀	麒麟	白虎	玄武
五色	青	赤	黄	白	黒
五数	八	七	五	九	六
五金	錫	銅	金	銀	鉄
五穀	胡麻	麦	米	黍	大豆
五果	李	杏	棗	桃	栗
五畜	犬	羊	牛	鶏	猪

因みに、王莽時代と後漢三国期の方格規矩四神鏡の区別は、図柄上では類似性が高く容易でないが、銘文に違いがある。たとえば王綱懷No.305では、

「新興辟雍建明堂、然于舉士列侯王、將軍令尹民戸行、諸生萬舍在北方、郊祀星宿並共皇、子孫復備(具)治中央」<sup>44</sup> (図 10)

とあり、これは新興辟雍建明堂が王莽の事績と重なり区別できる。そしてこれまで新と王が入る場合の飢食棗と記す銘文の鏡はすべて王莽時代とされている。

後漢では、永平 7 (64) 年七乳獸帶鏡に飢食棗の文言を記し、次のようにある。(図 11)

「尚方作竟(鏡)大毋傷、巧工刻之成文章、左龍右虎辟不羊(祥)、朱鳥玄武順陰陽、上有仙人不知老、渴飲玉泉飢食棗、永平七年九月造真」<sup>45</sup>

もう一面、後漢永平 16 (73) 年の龍虎鏡には、

「尚方干(作)鏡(真)大巧、上右(有)山(仙)人不知老、渴飲王(玉)泉飢食棗、浮日(由遊)夫(天)下兮、永平十六年」<sup>46</sup>

とある。こちらは欠筆や変体字が多く、漢代の年号鏡と言えるかどうか疑問であるが、ともかくこれらは飢食棗の文言が後漢の鏡に使われていたことを明らかにしている。ただ両鏡とも方格規矩四神鏡でなく獸帶鏡や龍虎鏡であることからみると、「上有仙人不知老、渴飲玉泉飢食棗」の句を五行思想とともに神仙思想が広まったことで、慣用的に用いたケースとしてみるべきなのであろう<sup>47</sup>。

<sup>44</sup> 王綱懷『漢鏡銘文圖集』上掲注 12, No.305

<sup>45</sup> 梅原未治『漢三国六朝紀年鏡図説』1943, 桑名文星堂, 図版 4

<sup>46</sup> 王綱懷『漢鏡銘文圖集』上掲注 12, No.461

<sup>47</sup> 後漢以降慣用語として用いたという指摘は三木氏による。上掲注 42 同頁



図10 王綱懷『漢鏡銘文圖集』No.305, 18.1 cm



図11 漢永平7(64)年 七乳獸帶鏡 18.8cm

樋口隆康氏の早期の研究によれば、尚方作鏡…渴飲玉泉飢食棗の文言を入れた銘文はK式に分類されている<sup>48</sup>。このK式は当時調べた鏡面1,184面のうち201面が方格規矩四神鏡で、その中で79面を占めている。銘文ではA式の四字句（長宜子孫、天王日月など）が最も多く263面で、K式は145面で、これに次ぐ多さである。

したがって、尚方作鏡…渴飲玉泉飢食棗の方格規矩四神鏡は、出土している鏡面の中では多数製作された種類であったことがわかる。またこの銘文の鏡は前漢の朝鮮半島の楽浪遺跡の石巖里や船橋里からも出土していることが明らかにされている<sup>49</sup>。よって「上有仙人不知老、渴飲玉泉飢食棗」と記す鏡は、前漢、新、後漢、魏に亘り長期的に製作されていたことが知られる。したがって、一般的慣用語としてこの文言が使われていた傾向も一応考慮しなければならない。

#### 4. 平原遺跡の鏡

平原出土の方格規矩四神鏡の銘文は[ ]部を省略している鏡銘を含め、型式は次の通りである。「尚方作(佳)鏡真大巧(好)、上有仙(山)人不知老、渴飲玉(王)泉飢食棗、浮游天下敖四(三)海、[徘徊神(名)山採(采)芝草、]壽如金(今)石為(之)国寶(保)、[避去不祥宜古(賈)市、相保]」<sup>50</sup>  
 []は挿入句、()は欠筆や略字・同音の当て字等を示している。

この銘文の尚方作鏡と始まる尚方について見てみよう。かつて梅原末治氏が指摘した、唐の杜佑『通典』巻27職官9に記す「秦置尚方令漢因之、…漢末分尚方、為中左右三尚方、魏晉因之、自

<sup>48</sup> 樋口隆康「中国古鏡銘文の類別的研究」『東方学』7,1953,p.3-7

<sup>49</sup> 梅原末治「方格規矩鏡について」『考古学雑誌』15-7,1925

<sup>50</sup> 「平原一号墓出土銅鏡銘文一覧」『国宝福岡県平原方形周溝墓出土品図録』伊都国歴史博物館2007,p.66-67

過江左唯置一尚方」とある文と<sup>51</sup>、出土している魏甘露 4 (259) 年および同 6 年の右尚方師作鏡…とある獣首鏡とが符合するとして、この見解が定説となり、その結果、これまで左右中尚方などと記さず単に尚方作と記す鏡は魏晋代ではないと理解されていたわけである<sup>52</sup>。

しかし、調べてみたところ『三国志』魏書の中に、

「減乘輿服御、後宮用度、及罷尚方御府百工技巧靡麗無益之物」<sup>53</sup>

とある。これは『三国志』魏書少帝紀、嘉平 6 (254) 年 10 月の改元にあたり述べている内容であるが、魏朝において尚方の呼称を用いていたことを示している。したがって、これまで魏鏡は右尚方の鏡のみとされ、尚方作とする鏡は魏晋代ではないとしてきたことに対して、このように『三国志』魏書に尚方と記載していることで、魏の時代に尚方作と記す鏡もあった可能性を示している。すると、平原の「尚方作…飢食棗」と記す鏡群も魏鏡の可能性をもつということにつながっていく。すなわち、これらが魏から倭の女王卑弥呼に下賜された「銅鏡百枚」という鏡に相当する可能性もあるということになるわけである。(図 12)

## 5. 桜馬場出土鏡

唐津桜馬場遺跡から出土した鏡 (2 面のうち 1 面) も平原出土鏡と類似の方格規矩四神鏡である。ここにやはり「尚方作鏡…飢食棗」と記している。これも魏の鏡の可能性が高いのではないかとと思われる。銘文は次のようにある。(図 13)



図 12 平原 1 号鏡 23.4 cm



図 13 桜馬場 (1) 佐賀県博 23.2cm

「尚方作鏡真大好 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食棗 浮遊天下敖四三 徘徊名山採芝草 壽如金石之國保兮」

<sup>51</sup> 唐・杜佑『通典』卷 27 職官 9 少府監,中尚署,中華書局 1988,p.759-760

<sup>52</sup> 梅原末治『漢三国六朝紀年鏡図説』上掲注 45,p.51-52。福永伸哉『三角縁神獸鏡の研究』上掲注 3,p.43-45

<sup>53</sup> 『三国志』少帝紀嘉平 6 (254) 年 10 月条上掲注 9,p.132

文中敖四海が敖四三となっている。これを(1)とする。もう1面には次のようにある。

「上大山 見神人 食玉英 飲澧泉 駕文龍 乗浮雲 長宜官」

一見して桜馬場(1)の鏡の画像および銘文が平原出土鏡と類似性をもつことがわかる。銘文はとくに平原のNo.2,3号鏡がほぼ同一の文章で、字形においても平原の28枚の尚方作鏡と比較してみると、それぞれ字形の類似性が高い。であれば桜馬場出土鏡と平原出土鏡は、源となる製作工房を一つに絞っていいのではないかとさえ思われる。

この二枚の鏡の入っていた桜馬場の甕棺は、遅い時期の桜馬場3式、原ノ辻上層式で、これまで弥生後期前半とされていた<sup>54</sup>。しかし、新たな見解が高橋徹氏により出されている<sup>55</sup>。氏は桜馬場遺跡出土の甕棺の胴部突起が胴部の下方に位置していることに注目して(これが弥生後期中ごろ)、同遺跡出土の巴形銅器(後期後半か終末)と有鉤銅釧(後期前半から中期)の共伴を通して、遺跡を通説の‘中期末から後期前半’をさらに下げて考えるべきことを提案した。

そしてつぎに井原鍮溝出土の巴形銅器について検討し、これが後期後半から終末にあたるとし、遺跡は桜馬場の次に井原鍮溝、そして平原の順であることを確認して、この両遺跡から出土した鏡と平原遺跡出土鏡との関係に及んでいる。

高橋氏は三遺跡いずれからも出土の方格規矩四神鏡について、これをA~Dに分類し、それぞれ1~3,4式に定めて、その結果方格規矩四神鏡は弥生後期中ごろから後半にあたるとした。ただ氏は鏡について製作時期と出土時期の間の大きな差に対して現地中国での長期間の伝世、あるいは復古鏡、踏み返し鏡の存在によるとし、これらは製作地、製作時、出土時期が近接しているときに生じやすい現象とみて、平原遺跡出土鏡のほとんどがほぼ同一時期の製作であるとも考えている<sup>56</sup>。また方格規矩四神鏡が内行花文鏡等と共伴する現象は前期古墳に顕著であることから、平原をその先例として位置づけている。その結果、平原遺跡は‘弥生終末期か遡っても弥生後期後半’であるとした。

以上が高橋氏の論考の概略である。ここから我々は方格規矩四神鏡の出土した桜馬場、井原鍮溝、そして平原の三遺跡の時代がいずれも通説より下ることを理解することができる。

## 6. 鉛同位体比

鉛同位体比について柳田康雄氏は平原遺跡の報告書の中でつぎのように記している<sup>57</sup>。

「同型鏡でありながら鉛同位体比分析でばらつきが出るのは、製作時期の違いと考え、分析値が隣接するものが同時期に製作したものとなる。すなわち時期の違いによって原料の違いがあるか原料に混合が生じるもので、保存されていた原型を適宜使用してその時点で得られた原料で製作したものと考えられる。だからこそ着色の有無や研磨程度の違いが生じるのである」と。

<sup>54</sup> 岡崎敬・木下尚子「桜馬場遺跡」『末盧国』六興出版 1982,p.345

<sup>55</sup> 高橋徹「桜馬場遺跡および井原鍮溝遺跡の研究」『古文化談叢』32,1994

<sup>56</sup> 同上,p.95 注 41

<sup>57</sup> 柳田康雄,上掲注 2「方格規矩鏡の検討」『平原遺跡』前原市教育委員会 2000, p.119

分析値が隣接するものが同時期に製作したものとなるとの指摘は7種の同型鏡(3-4、7-9、10-14、24-26、32-33、34-35、37-39)があることを念頭に置いて発言している。たしかに同型鏡はそれぞれ近似する数値である。

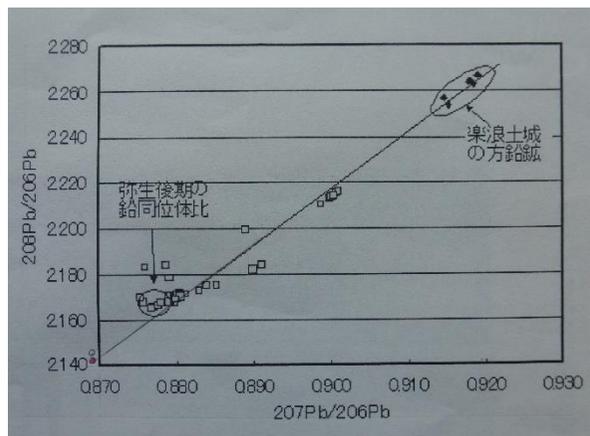
鉛同位体比について研究を続けている新井宏氏は、論文「平原鏡から三角縁神獸鏡へ」の中で<sup>58</sup>、これら大量の同型鏡を出土した平原鏡について鉛同位体比法の分析を通して「楽浪土城の方鉛鉞が楽浪郡付近の鉞山の方鉛鉞とよく似ている」と述べて<sup>59</sup>、楽浪郡近辺の鉛が使用されている可能性を明らかにしている。掲示された表2 朝鮮半島の方鉛鉞遺物関連の鉛同位体比一覧表では、楽浪土城の銅鉞・銅器類の鉛同位体比の数値が、平原出土鏡の数値とやはり平均値に近いことがわかる(表2)。すなわち平原の鏡が多く楽浪の鉛に関係するという意味である。

また楽浪土城出土の方鉛鉞と青銅器遺物の鉛同位体比と、平原出土鏡と楽浪土城方鉛鉞の鉛同位体比の関係では、「漢代・弥生後期の鉛と楽浪の鉛を結ぶ直線上に分布する平原鏡が半数近くも存在する」と述べて、この直線上に載る遺物が楽浪の鉛を使用したとみている。五島美術館所蔵の魏の正始5年鏡や楽浪王盱墓出土の長宜子孫鏡の鉛同位体比でもこのライン上にほぼ載ることがわかる(表3のグラフ)<sup>60</sup>。表の左下が一群の平原鏡で枠外に書き加えた○印が正始鏡と王盱鏡の位置である。

表2

	206pb /204pb	207pb /206pb	208pb /206pb	207pb /204pb
楽浪土城の銅鉞・銅器類	17.699	0.8758	2.1688	15.548
平原鏡数値の平均値	17.621	0.8816	2.1763	15.531

表3



<sup>58</sup> 新井宏「平原鏡から三角縁神獸鏡へ」『季刊考古学』113 梓書院 2012.4

<sup>59</sup> 同上 p.9 および図 6,7

<sup>60</sup> 新井宏「鉛同位体比から見た三角縁神獸鏡」『古代の鏡と東アジア』学生社 2011,p.97 図 4

関係する鏡を新井宏氏の集められた統計で拾い出してみよう<sup>61</sup>（表4）。この表からは柳田氏が指摘した平原遺跡の舶載（中国製）鏡No.16（図14）と、同舶載鏡No.17（図15）が<sup>62</sup>、鉛同位体比において魏正始五（244）年の紀年鏡（図16）や楽浪王盱墓出土の長宜子孫鏡に近似する数値を示していることがわかる。つまりこの4面はいずれも中国製ということである。このことから、平原遺跡の他の鏡、例えば28号鏡（図18）でも、形式の上での類似性からみて、楽浪付近の中国鉛による製作ということが想定される。

新井氏は、朝鮮半島から類似の超大型鏡などが出土しないことで平原鏡は日本での倣製鏡とみている。しかしこの回答を鉛同位体比から得ることはできないとも述べているので、鉛同位体比では日本での製作か他の地域での製作かは判断できないということである。

つぎに、新井氏が紹介している西川寿勝氏について、氏は楽浪鏡（図19）を元にして作られた複製鏡を3例あげ、そのうち鳴門市萩原墳墓群1号墓出土の画文帯同向式神獸鏡が、楽浪出土の鏡の文様と銘文に加えて割れ傷まで写していることを示して、それが踏み返し鏡であることを明らかにしている<sup>63</sup>。つまり楽浪地域の鏡の中に多くの鏡を製作できる踏み返し鏡が存在することを明らかにしたわけである。

そこで、『三国志』魏志韓伝にある楽浪公孫氏の関係を注目してみると、3世紀の初頭、公孫康が楽浪郡の南を帯方郡として、公孫模と張敞の軍を派遣して韓を攻めた結果、韓も倭も帯方郡に所属したという記事が見える<sup>64</sup>。アメリカのフォッグ美術館が所蔵する「公孫家作竟」と記す鏡（図17）は、公孫氏が鏡を生産していたことを裏付けるものであろう。ともかく、西川氏が楽浪鏡と一括してよび、三角縁神獸鏡と楽浪出土鏡との関係に注目する点は、今後の更なる解明の糸口になるに違いない。

表4

鏡名		pb206	pb207	pb208	pb207	新井宏 出典
		/pb204	/pb206	/pb206	/pb204	
楽浪王盱墓出土鏡		17.934	0.8694	2.1461	15.592	日19 p55
正始五(244)年鏡	(図16)	17.888	0.8695	2.1432	15.554	日19 p59
平原16号四葉鏡	(図14)	17.860	0.8723	2.1557	15.579	日30 p55
平原17号四龍文鏡	(図15)	17.845	0.8737	2.1597	15.591	日30 p53
平原28号鋸歯文鏡	(図18)	17.737	0.8765	2.1620	15.546	日30 p54

<sup>61</sup> 新井宏, PB 一覧表 <http://arai-hist.jp/database/pb/pb-database.pdf> (最終閲覧日 2018年2月25日)

<sup>62</sup> 柳田康雄, 上掲注2 「平原王墓出土銅鏡の観察総括」『平原遺跡』前原市教育委員会 2000, p.118, №34

<sup>63</sup> 西川寿勝『三角縁神獸鏡と卑弥呼の鏡』学生社 2000, p.109

<sup>64</sup> 『三国志』魏書韓伝, 上掲注9, 三 p.851。土器の関係での指摘は、久住猛雄「奴国とその周辺」『邪馬台国をめぐる国々』雄山閣 2012, p.86にある。



图 14 平原 No.16号 18.7cm



图 15 平原 No.17号 16.5cm



图 16 魏正始 5 (244) 年鏡 13.0cm 五島美



图 17 永平 7 (64) 年公孫家鏡 13.3cm



图 18 平原 No.28 18.2cm



图 19 方格規矩鏡 桑浪出土 梅原著

図,表出典

- 図 1 『西清続鑑』 上掲注 8, p. 29
- 図 2 『古鏡-その神秘の力』 川崎市市民ミュージアム 2015, 上掲注 11, 図Ⅱ-62
- 図 3 王綱懷 『漢鏡銘文圖集』 下上掲注 12, No.330
- 図 4 王綱懷 『漢鏡銘文圖集』 下上掲注 12, No.336
- 図 5 徐乃昌蔵 『中国古鏡拓影』 上掲注 18, No.83
- 図 6 王綱懷 『漢鏡銘文圖集』 下上掲注 12, No.315
- 図 7 同上, 上掲注 12, No.331
- 図 8 梅原末治 『鑑鏡の研究』 上掲注 7p. 12
- 図 9 憑雲鵬 『金石索』 上掲注 16
- 図 10 王綱懷 『漢鏡銘文圖集』 上掲注 12, No.305
- 図 11 梅原末治 『漢三国六朝紀年鏡図説』 上掲注 44 後漢永平 7 年七乳獸帶鏡
- 図 12 『国宝福岡県平原方形周溝墓出土品目録』 伊都国歴史博物館 2007, p. 1. No.1
- 図 13 岡崎敬ほか 『末慮国』 六興出版 1982 図録篇 No.36
- 図 14 上掲図 12, p. 21 図版 19
- 図 15 同上, p.22, 図版 20
- 図 16 五島美術館蔵, 『古鏡-その神秘の力』 川崎市市民ミュージアム 2015, p. 55, III 18
- 図 17 樋口隆康 『古鏡』 新潮社 1979, 図版 31, No.62
- 図 18 同上掲図 12, p. 33, 図版 31
- 図 19 梅原末治 『鑑鏡の研究』 上掲注 7, 図版 1
- 表 1 上掲注 40
- 表 2 上掲注 58, p. 10 表 2, p. 16 表 3 による。
- 表 3 上掲注 60
- 表 4 上掲注 61, PB 一覧表 p. 53-59

## Resume

## The Existence of the Mirrors of Wei Dynasty in the Age of Three Countries

Mitsuru KOYAMA

In the Hirabaru remains known as Ito country of queendom of Queen Himiko of the third century Era, it was done in investigation and a study of Mr.Dairoku Harada till now as about the middle of the second century.

However Yasuo Yanagida who engaged in excavation claimed to postpone of the remains.

I clarified the possibility of the problem, I examined mirrors of Cao-cao, Cao-zhi that were considered to be Wei mirrors by documents based on the other mirrors.

And this pattern of these mirrors are used from ex-Han to the three countries, for a long times in China. And the thought named Wu-xing was the mental prop of each dynasty.

In the case of Wei, profess itself to be soil virtue, and the word jujube written on the mirrors was equal the thing of the soil virtue.

And I pointed out that the same content was written down on the mirror excavated in Karatsu Sakura-no-baba remains known as Matsura-koku of queendom of Queen Himiko of the third century.

Because the mirrors of Hirabaru remains were near to excavated bronze things from Rakuro remains of the China Zone by the analysis of the lead isotope ratio, proved the similarity between the mirrors and excavated bronze things.

Therefore, I clarified the possibility that the Hirabaru mirrors adapted to 100pieces of copper mirrors that were granted by Wei Dynasty to queendom of Queen Himiko of the third century.